毎日新聞寄附講座08年度春季「ジャーナリズムの現在Ⅰ」
テーマ：国際報道を考える

第3回「国際報道—旧ソ連・ロシアの場合」

2008年5月13日
毎日新聞外信部編集委員
飯島一孝

1、ソ連崩壊（1991年）を世界のメディアはどう伝えたか

①事実を中心にクールに伝えた日本のメディア
②“ゴルバチョフびいき”を示した欧州のメディア
③混乱状態を露呈したソ連のメディア

2、日本メディアの報道はソ連崩壊後どう変わったか

①取材の自由化で取材対象も大幅に広がる
②ロシア・メディアの引用報道が大幅に減る
③要人インタビューや「紙取り」競争が激化

3、ロシアのメディアはどう変わったか

Ⅰエリツィン初代大統領時代（1991年－1999年）＝ソ連崩壊後、民主化、市場経済化が進み、国民はユーフォリア状態に。マスコミも最初は自由を謳歌

①「プロパガンダ」から「ファクト」の報道へ
②大資本の傘下に入るメディア
③政権末期には政治問題に介入も

Ⅱプーチン第二代大統領時代（2000年－2008年）＝旧KGB出身の大統領で、秩序維持・社会の安定を優先。後半は西側から強権的との批判浴びる

①政権側の報道への介入が露骨に
②政府系企業の買収が相次ぐ
③「検閲復活」を懸念する編集サイド

Ⅲメドベージェフ第三代大統領時代（2008年～）＝リベラルだが、プーチン前大統領との双頭体制でどうなるか不透明

4、ロシア報道の問題・課題

①欧米の視点に流されやすい報道姿勢
②日本の読者・視聴者に迎合していないか
③先入観を持たずに取材しているか

以上